

九州国有林の竹林について

九大農学部 青木 尊 重

I 熊本管林局の御援助で昭和25、26年と九州国有林の竹林の一部を踏査する機会を得た。之に先立ち首題に関し予備知識を得たいと考へ、昭和25年6月各管林署に「管内竹林の現況調査」を依頼し回報に待したが益するところ大であつたので、一部を抜き出し報告する。(詳細な資料は暖帯林に投稿の予定である。)なお調査方法その他に御指導を賜つた九大井上放教授、極めて煩雑な調査事項にも拘らず御協力下さつた各署の職員各位に厚く謝意を表します。

II 今回は経営的観点に立脚して論述すること、する。即ち一般に農林業経営の目的は出来るだけ多くの且保続的な私経済的利益を獲る事にある。故に経営者はその経営地面積に最も合理的に資本及労力を加えんとするが、夫を利用し得る程度はその経営の社会経済的條件と自然的技術的條件とに依存するものと考へられる。而して筆者は特に後者に属する①交通地位 ②自然的要素 ③担当者の個人=技術的事情と当該林地との関係について考察を試みよう。

1) 交通地位条件の良否は特に生産物(竹材、筍等)の販売と土地利用手段(器具、肥料等)の受入れ及び労力等の点から影響される。然るに九州国有林の竹材の夫は管林署一般にその地方の物資集散の中心地に所在一々管理担当者住居と該林地間の距離、所要時間が割合に大きいので積極的経営には不利不便の点が多く、管理経営上民有林の夫に遠く及ばない。

2) 竹林の充分な生育を期するには、①新竹の発生数量、②生産竹材の形質、③林地の保護撫育等に重要な影響を与える自然的要素の適、不適を知らなければならぬ。その適地基準¹⁾²⁾は一般に「凹分布上我国四大竹種は暖帯を郷土とし、凹位置及び地勢は地下茎の伸長や鬚根の生育上凹地で排水良好な東南面の緩斜地を理想とし、凹土質は上層に砂壤土、下層に砂土或は礫土で、凹受候上温暖な気候に適し大体本州以南」とされている。

他方国有林に多くみられる四面一様且高所にあり、傾斜角大で風雪の影響を受け易い立地に於て如何に人為的に品質良好な竹林産物の産出を望んでも却々思ふにまかせぬのは必見上述の要件を具備しないものが多い為である。但し品質に重きを置かなければ何れの立地も比較的容易に生産力を向上し得る潜在力を有するものと推察される。

3) 担当者の個人=技術的事情(専向技術的知識、判断力、創造性、意欲

等)により一集約的にも粗放的にも経営可能な竹林では一特に左右されるもので、個人的活動領域も極めて大であり、又相対的経営規模が小さいため他との力の配分関係や地元事情によつても非常に異つてくる。

以上の諸条件然も何れもが相交錯して経営に影響してその結果数々の経営方式が生れる。且種々の経営部向が有機的に組合わされて最大の収益をうる様に組織されている我国有林の特徴も改めて銘記しなければならない。

次に経営方式について論及すると、

- Ⅲ 竹林の経営方式は林業的—九州、四国地方に多い—経営法と農業的—京都地方に発達する—経営法とに大別出来、前者は主に放任的で只竹類の繁殖力強大な為天恵的に竹林を形成するに過ぎず、且需給の平衡を得ないのでその収利性甚だ少いとされ、後者、即ち京都地方は既に維新前より竹林産物の需要と利用法が最も発達した結果、一種の栽培業として殆んど林業の範囲を脱して農業的になり、その収利性甚だ大と云うが、之に費す労力と資本はともに又多くを要して未だ経済的に得策だとは堅卒に結論し得ない憾みがある。要は兩者の長を取り短を補いこの天恵的な繁殖力の助けを借りて一面には適当な保護管理によつて多大の収益を獲得する様な経営方式を探求する心算がある。然し乍ら如何なる環境の下にも通用する最も優越した経営方式はないので、環境の異なるに従い夫々最もよく適応する経営組織を考へるべきである。何故ならば農林業にあつては本来一定の土地を前提としその下に於て如何なる運営がより一層合理的であるか、又経営と終管との關聯、経営の計画化等の面に思いを致すべきであるから。

附)

- イ) 林況に於て直径及び年令配置からみて蓄積がや、低いものが見受けられるが登筍時の被害や絶同ない気象上の圧迫且撫育が放任されているものも若干あるための結果であろう。
- ロ) 作業上撫育を放置し、夏季伐採、輪伐期四年のものが存在するのは一考を要する。
- ハ) 生産竹材の用途をみると、主に小径材を供給しているものが多い様である。
- ニ) 附近市場、地元一帯で最も好んで消費される竹材について、その竹材の年令、径級、形態、特質等の認識や生産竹材の長所欠点に対する対策等に不十分なものがある。
- ホ) 登筍関係の資料に纏りをみない。萌芽林に於ける萌芽と同様登筍時期の生長の状況、筍に影響する因子等には最も関心をもつておくべきで、竹林

経営における技術面の成否を左右するものである。

屋久島に於ける原生状態

天然生林の南北面について

熊本管林局 吉村 明、秋山 智英

1. 緒言

屋久島は極めて高温多湿であり而も之等の気象と壮年期の地形によつて生じた特異な環境のもとに我々のスギ天然生林の南限であるヤクスギ(樹令1,000年以上)及コスギ(樹令1,000年以下)が成立していることは衆知のことであるが、之等のスギ天然生林の成立している標高7~9.00^m~1.4~1.500^mの所謂奥岳地帯を詳細にみると南北両面によつて林分構成状態が相当異なることがわかる。依つて経営策編成の際の無木調査資料から天然生林の各因子を分析し比較検討することによつて将来のスギ更新の基礎資料の一にするものである。

2. 調査箇所

(1) 下屋久経営区95林班 南面 調査面積4.50ha 傾斜20°

(2) 下屋久経営区92林班 北面 調査面積4.30ha 傾斜22°

地況を説明すると両区域共安房川上流の対岸であつて、附近は小さな一つの地形区をなし空中湿度は極めて高く、雨量その他の環境は殆んど同一である。両林分共に標高は950^m~1,150^m(地形図により推定)であつて、屋久島に於ける針葉樹を主体とする原生状態天然生林の南面、北面の代表的林分である。広葉樹の樹種名は両林分共にウラジロカシ、ミヤコガラ、ヒメシヤラ、ヤマグルマ、ツバキ、サカキ、サクラツツジ、ハイノキ等である。

3. 調査結果

方位	調査面積	種類	ヤクスギ	ヤクスギ樹	コスギ	ツガ	モミ	(針計)	(広計)	総計
南面	4.50 ^{ha}	相当本数	4	1	100	22	15	(142)	(672)	814
		歩合%	-	-	12	3	2	(17)	(83)	100
		平均樹高 (^m)	168	156	64	70	102	(78)	(18)	38
		相当蓄積 (^{m³})	67	10	280	114	108	(577)	(57)	636
		歩合%	10	1	44	18	17	(70)	(10)	100
		相当採出高 貯蓄量(^{m³})	8,7617	2,1452	32,8540	13,5713	11,7775	(67,3476)	(18,2732)	87,6208
		歩合%	10	3	38	15	13	(79)	(21)	100